

Vol.10 『高津氏の情念と真屋さんの決意』

蝶と舞う阿国

August. 1. 2007

7月26日：劇団「樹間舎」公演 『人形師忠三郎千夜一夜 出雲の阿国蝶に噛まれる』
作：演出：高津住男 於：北沢タウンホール

幕開きの口上を車椅子に乗った真屋順子さんが述べ、舞台は客席から観客に台詞を掛け合いながら、浄瑠璃人形師・忠三郎に扮した高津住男さんの登場で終幕まで一気に駆け抜けた。

舞台は筋立てが難解な部分もあったが、奇人変人と謗りを受けながらも自分の世界を創り上げる摩訶不思議な忠三郎の情念を花壇の花のような人形たち、異形な登場人物と交錯させた劇構成。

文楽を意識した舞台では“太夫と三味線”は“エレキギター&キーボード”を奏でながらの浄瑠璃となり夢幻な世界を彩った。大詰めに阿国人形に扮した真屋順子さんが蝶と舞うフォルムでの終幕に舞台は、静かに熱い観客の拍手に包まれた。

2000年の暮れに真屋順子さんが脳出血で倒れ、懸命なりハビリ後に活動を開始。以後、ライフワークとして取り組んでいた『出雲の阿国』を2003年に再演まで果たした。その間の苦労は計り知れなく、御主人で劇団代表の高津さんと御家族の協力と愛情が支えあつての再起。

真屋順子さんと言えば「欽ちゃんのどこまでやるの」での“欽ちゃん”の奥様役でお茶の間の人気者として活躍。当時の日本の幸せなる庶民の典型を楽しませてくれた女優が一般的印象なのかもしれません。今回は等身大の真屋さんが“ありのまま”に障害をも受け入れて、壊れた人形を演じることで私たちに感動を与えてくれました。

挑発的なまでの劇的世界はそれゆえに「樹間舎（高津&真屋）」の決意と情念（夢）を突きつけた舞台となりました。

劇団結成の準備段階の公演でお付き合いさせて頂いた縁で今回の御案内を頂いた。劇場からの道々に昔、高津さんが新しい劇団を旗揚げすると熱く話された事、そして何故か、真屋さんの作ったカレーライスの味を思い出した。

歌舞伎の創始者である“阿国”は俳優としては魅力ある存在ではあると思います。それ故に誰でもが演じて良いとは思わないのですが、真屋順子さんには、あらゆる表現で“阿国”になって頂きたいと夏の夜に思いを馳せました。

「ありのまま」真屋順子+高津住男著 主婦の友社刊